

平成二十四年度

問題冊子

教	科	目	ページ数
国	語	国	語
12			

試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。

解答の書き方

1. 解答は、すべて別紙解答用紙の所定欄に、はっきりと記入すること。
2. 解答を訂正する場合には、きれいに消してから記入すること。
3. 解答用紙には、解答と志望学部及び受験番号のほかは、いっさい記入しないこと。

注意事項

1. 試験開始の合図の後、解答用紙に志望学部及び受験番号を必ず記入すること。
2. 問題の内容についての質問には、いっさい応じないが、その他の用事があるときは、だまって手をあげて、監督者の指示を受けること。
3. 試験終了時には、解答用紙を机上の右側に置くこと。
4. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

〔1〕 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

現代人は、心の完全な平静を得ることに、悟りを得ることに、賢者になることに、無欲無心となることに、真剣な興味をもっていない。私たちが関心をもっているのは、受験用の知識習得法であり、出世のためのスキルアップ術であり、記憶力をイジ^⑦するような手軽な健康法であり、あるいは、顧客によい印象を残せるような自己コントロール法であり、それに関連するような脳活動である。^①脳科学者の関心は、一般社会の関心を反映している。

「脳のどこの部位が創造力を担っている」とか「コミュニケーション能力の中枢はどこだ」といったような脳科学的研究は、^②あまりに素朴な言葉の実体視から生まれている。

たとえば、創造力とは何だろうか。子どもの頃に無人島に漂流してしまった子どもがいたとしよう。その子は、何と自分一人で落体の法則を発見したとしよう。その天才的な子の発見は創造的だろうか。残念ながら、無人島から現代社会に帰ってきて、その子が落体の法則について述べたとしても、現代科学にいかなる貢献もできないだろう。学校でその法則を教わった凡庸な同級生も同じ事を知っていて、同じ計算ができるのだ。それでも、その子はひとりでそれだけの発見をしたのだから、次々に新しい科学上の発見をする能力をもっていると考えていいだろうか。もちろん、その可能性もある。しかし、将来はどうなるかわからないというのが本当のところだろう。あるいは、知的な障害をもった子どもが、その子としては、大変に飛躍的な知性の発揮をして、同級生が解いている算数の問題を解いたとしよう。その子の経験は、その子にとって重要な発達上の意味があり、特別支援教育にとっても大きな教育方法論上のヒントとなっても、残念ながら、「創造的」とは呼ばれないのだ。ここからも分かるように、創造力とは、ある社会において何かの新しいものを作ったり、見つけたりして貢献をする能力なのである。ひとりの行動だけ取り出して、それが創造的かどうかを言うことはできない。

コミュニケーション能力も同様である。コミュニケーションは、受信者と発信者がおり、その役割が交代する。コミュニケーション能力が何を意味するか明確ではないが、聞き手があつての話し手であれば、^③よいコミュニケーションが相互作用から生じるものであることは明らかである。どんな演説の名手も、何の意欲もない観客の前ではよい演説などではしなないだろう。それ

〔注〕 1 汝南—今の河南省汝南。

2 市掾—市場を管理する役人。

3 玉堂嚴麗—莊嚴な玉の御殿。

4 旨酒甘肴—美酒とごちそう。

5 一升—〇・一九リットル。

問一 傍線部①「莫之見」、②「子寧能相隨乎」を、全てひらがなで書き下し文にせよ。

問二 傍線部①「翁知長房之意其神也」について、「意其神」はどのようなことをいっているか。簡潔に説明せよ。

問三 傍線部②「翁約不聽與人言之」とはどのようなことをいっているか、また「之」の指す内容を簡潔に説明せよ。

問四 老人と費長房との別れの宴についての記述において、老人が仙界の者であったことはどのようにあきらかにされているか。簡潔に説明せよ。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(設問の都合で、送りがなを省いたところがある。)

費長房者、汝南人也。曾爲市掾。市中有老翁賣藥。懸一壺於肆頭。及市罷。輒跳入壺中。市人莫之見。唯長房於樓上覩之。異焉。因往再拜奉酒脯。翁知長房之意。其神也。謂之曰、「子明日可更來。」長房旦日復詣翁。翁乃與俱入壺中。唯見玉堂嚴麗。旨酒甘肴盈衍。其中共飲畢出。翁約不聽與人言。之後乃就樓上候。長房曰、「我神仙之人。以過見責。今事畢當去。子寧能相隨乎。樓下有少酒。與卿爲別。」長房使人取之。不能勝。又令十人扛之。猶不舉。翁聞笑而下樓。以一指提之而上。視器如一升許。而二人飲之。終日不盡。

(後漢書)

以前に、よいコミュニケーションが何であるかをあらかじめ定めなければならない上に、相手とコミュニケーションが置かれた状況や文脈を無視して個人の能力を単独で測ることなどははしまい。一言で言えば、コミュニケーション能力なるものは固体の内部状況だけで定義できるものではないのだ。

科学がデータに基づいた客観的なものであること、それが社会的価値を背負ったものであることは、^①ムジユンすることなく両立する。脳科学の用いている心理学的カテゴリーは、私たちの社会の価値を反映したものである。この点に無自覚であるような「客観的」研究は、現在の社会のあり方を無前提に受け入れて、その上に自らの研究を進めていることになる。日常的に使われている言葉を、まるで^②ギンミすることなくそのまま用いることは、^④そこに含まれている社会規範も無批判に踏襲することである。脳科学者も心理学者も、この点に注意深くあるべきだ。古代ローマに脳科学者がいたとすれば、^(注1)フアステイウムをいかに発達させるかといった研究をしたにちがいない。

心のはたらきの分類は、原子の分類のように、自然のなかに存在している区別をそのままにとりだしてきたものではない。これまで見てきたように、心のはたらきは、組み立てブロックのようにどこからどこまでと明確に線が引かれているものではない。^(注2)心のはたらきや状態に関する分類は、そもそも、すでに存在しているものを記述するために作られたものではない。先に感情について論じたときの嫉妬や競争心の例のように、^⑤自分の「マ」を定義づけ、それを評価し、その評価に基づいて制御しようとする規範性が、心のはたらきや状態の分類には含まれている。

人間の心理を表現する用語は、脳科学での「ニューロン」とか「前頭葉」とか「側脳室前角」といった対象を指示するための記述的な用語とは、役割が^⑥コンゲン的に異なる。記述的な用語には、社会的評価や価値の側面は含まれていない。それに対して、心理的な用語はそのなかにすでに評価的・価値的な意味が含まれている。私たちは、心理的な用語で自分の行動を説明し、気持ちを言い表しているときには、同時に、それに対する評価と、その後何をするべきかといった価値についても言及していることになるのである。

(河野哲也『意識は実在しない』)

- 〔注〕 1 ファステイディウム―古代ローマにおける、階級意識や貴族的感覚に密接に関係した侮蔑的な嫌悪感のこと。
2 先に感情について論じたとき―筆者は問題文よりも前に「感情」について論じている。

問一 傍線部㉗㉘のカタカナを漢字に直せ。

問二 傍線部①「脳科学者の関心は、一般社会の関心を反映している」とあるが、「脳科学者」の研究にはどのような問題があると筆者は考えているのか。本文全体を踏まえて、簡潔に説明せよ。

問三 傍線部②「あまりに素朴な言葉の実体視から生まれている」とあるが、なぜこのように言えるのか。わかりやすく説明せよ。

問四 傍線部③「よいコミュニケーションが相互作用から生じるものである」とあるが、どういうことか。具体的に説明せよ。

問五 傍線部④「そこに含まれている社会規範」とあるが、どういうことか。例をあげて、具体的に説明せよ。

- 〔注〕 1 左衛門の内侍―内裏の女房。 2 うちの上―天皇。 3 ふるさとの女―実家の召使の女。
4 式部の丞といふ人―藤原惟規。紫式部の弟か。兄と見る説もある。 5 宮―中宮彰子。
6 しどけながら―正式ではないが。 7 殿―藤原道長。

問一 傍線部 a、b、c を口語訳せよ。

問二 傍線部①について、こうした行動をとった理由を推測せよ。

問三 傍線部②「かかること」の指す箇所を、本文から五十字以内で抜き出せ。

問四 傍線部③「憂きものにはべりけり」には、筆者のどのような嘆きが込められているか。説明せよ。

[3] 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

左衛門の内侍といふ人はべり。あやしうすするによからず思ひけるも、え知りはべらぬ心うきしりうごとの、おほう聞こえはべりし。

うちの上の、源氏の物語、人に読ませたまひつつ聞こしめしけるに、「この人は、日本紀をこそ読みたるべけれ。まことに才あるべし」と、のたまはせけるを、ふと推しはかりに、「いみじうなむ才が」と、殿上人などにいひちらして、日本紀の御局とぞつけたりける。いとをかしくぞはべる。このふるさとの女の前にてだにつつみはべるものを、さる所にて、才さかし出ではべらむよ。

この式部の丞といふ人の、童にて書読みはべりしとき、聞きならひつつ、かの人はおそう読みとり、忘るるところをも、あやしきまでぞさとくはべりしかば、書に心入れたる親は、「口惜しう、男子にてもたらぬこそ幸なかりけれ」とぞ、つねになげかれはべりし。

それを、「男だに才がりぬる人はいかにぞや。はなやかならずのみはべるめるよ」と、やうやう人のいふも聞きとめてのち、一といふ文字をだに書きわたしはべらず、いとてづつにあさましくはべり。読みし書などいひけむもの、目にもとどめずなりてはべりしに、いよいよ、かかると聞きはべりしかば、いかに人もつたへ聞きてにくむらむとはづかしさに、御屏風の上に書きたることをだに読まぬ顔をしはべりしを、宮の、御前にて文集のところどころ読ませたまひなどして、さるさまのこと知らしめさまほしげにおぼいたりしかば、いとしのびて、人のさぶらはぬもののみまひまに、をとしの夏ごろより、楽府といふ書二巻をぞ、しどけながら、教へたてきこえさせてはべる、隠しはべり。宮もしのびさせたまひしかど、殿もうちもけしきを知らせたまひて、御書どもをめでたう書かせたまひてぞ、殿はたてまつらせたまふ。まことにかう読ませたまひなどすること、はたかものいひの内侍は、え聞かざるべし。知りたらば、いかにそしりはべらむものと、すべて世の中、ことわざしげく、憂きものはべりけり。

『紫式部日記』

次の文章は、明治三十九年に発表された国木田独歩「帽子」の後半である。「自分」は春のある日、乗合馬車でいやな男と乗り合わせてしまった。道ばたで獅子芸をやっている子ども顔に銅貨を投げつけるような男で、車内でも自慢ばかりしている。彼は、異様な眼光を持った筋骨たくましい商人で、新調した帽子をかぶっていた。目の前に座る彼について、「自分」は、「彼の神経に多少の異常がある」と思い嫌悪感をつのらせる。以下はそれに続く場面である。これを読んで、後の問いに答えよ。

自分は成るべく眼を閉ちて前の男を見ないやうにと力め、談話も耳に入らないやうにと空想を喚び起して其中に身を隠して居た。其中夢心地になつて半は居睡をして居たが、ふと眼を開けて外を見ると、何時しか雨となつて、春雨しとくくと野も山も霞み、その静けき、穏かな景色の中を馬車は飛やうに走つて居た。雨に濡て緑深き林を過たと思ふと直ぐ一簇の家村に出て馬車は止まり、一人の客が乗た。

「ヤア先生、何処へ旅行になりました？」と自分を見て挨拶をする、これは某町に於ける自分の生徒の一人であつたので、二十七八歳の晩学を止め、今では家業に従事して居るのである。彼は自分に言葉をかけて傍に腰を下し、そして自分の前の男に一寸と目礼した。先方は例の帽子に指先をかけたが、互に別に言葉を交さず。

馬車は直ぐ走り出した。自分は談話の対手が出来たので、不快から救はれ、今度の自分の遠足の事など語り、をりく外を眺めて居たが、夕暮近く、遠近の茅屋から上る炊烟は糸の如き雨に和して重く軽く樹林を包んで居る景色、田舎慣し自分にも悪くはなかつた。前の厭な男は相変らず他の者と喋舌つて居たが、町へは最早や十町となし所まで来た頃、彼は何と思つたか硝子窓を開けて身体を横に捻て外に頭を出した。其途端例の帽子が飛んだ。彼の対手はあつと驚き、彼も驚き、人々は御者に馬車を止めると叫んだが、御者台の若者に此事が知れない、馬車はどしどし走る、此時彼は、

「何、あんな帽子、構ひませんわ」と低い重い声で言つて、冷やかに笑みた。

「だつて、捨るといふ事はありませんわ」と相手の一人が息急んで言ふ。

「フ、ン」と言つて、彼は手荒く額を摩つた。

問四 傍線部③「結局、自分までがやられて了まつた」とあるが、ここには「自分」のどのような思いがこめられていると考えられるか。「自分」の男に対する考えの推移を考慮しつつ、詳しく説明せよ。

其中馬車が静かに止つたので、如何した事かと自分も酔興に窓を開けて、来し方を見ると、一人の農夫が、「オイ〜」と呼びながら帽子を持って懸命に追駈けて来るのであつた。

間もなく農夫は馬車の傍まで来て、其泥だらけの手に帽子を捧げながら、麥に手入れをして居た自分の傍に落たから拾つて来て進ぜたとの意を、呼吸づかい苦しげに、とぎれ〜に言つた。すると帽子の主は、

「そんな帽子お前に呉れてやる、欲けりや持てゆけ不欲んなら捨てろ！」と言ひ放つた。これを聞いて、さなきだに飛ぶが如き馬車を追駈けたため、蒼ざめて凄味を帯びて居た農夫の顔色は土の如く、唇は顫動き、眼光鈍く悲しげに、じつと前の男の顔を見つめて其処に直立つた。余りの事に何人も一語も発し得ない。

「未か！」と御者台の男は叫んだ。

「早く出さんか！」と前の男は怒鳴り返した。

鞭音高く馬背に響くや、馬車は遠慮なく駈だした。

前の男は外に帽子なき頭を出して後を見て、

「未だ此方を見て立つて居やがる。フン！」

舌打ちして荒く窓を閉めた。

「折角だから取つてやれば可う御座んすに」

と相手の一人は僅かに口を開いた。

「何に彼な帽子、拾うたから与れば可え」

「けれど彼の漢が可憐さうな」

「貰つて結局、嬉しからう」

相手は黙つて了まつた。最早余り口をきく者が無い。其中間もなく馬車は町に着いて佇つた。夕闇薄暗らく、家々は既に燈を点けて居た。

合乗の者はそれ／＼挨拶をして車を出た。彼の男も外に下りて、駒下駄を爪立て、二足三足歩いたと見るや、アツと叫んで、尻餅をついた。誰も驚ろいて何事かと近き、彼の知る人は、

「如何したの、如何なされた」と援け起しにかゝつた。動かない、彼は殆ど気絶の体である。其処で人々は愈々驚き側の店先に担ぎこんで水を吞すなど種々、介抱すると、漸く正気づきし如く、立上つて四辺をきよろ／＼見廻して居たが、嘎れた声で、

「皆様今こゝで先刻の漢を見やしませんかノ」

「先刻の漢といふて何人？」と一人が聞く。

「そら先刻の農夫、あれが今、自分が馬車から出たと思ふと、眼の前にひよつくり出て来て、彼の時と同じ顔をして帽子を突き出しましたと思ひなされ……」

人々は殆んど戦慄をした、恐らく何人も其刹那に彼の農夫の顔が眼先に顕はれたらうと思ふ。

兎も角、彼の男を慰めて一同は散じた。

それから三四日経つと、馬車に乗合はした彼の知人がやつて来て、

「先生、彼の男を如何思ひなされます。」と聞く、それは気絶の一件である。

「實際妙な事もあるものだね。」

「實際農夫が現はれる筈はありませんが、先づ罰で御座いませうノ」

「そうかも知れんサ、けれど我々にも彼の時の農夫の顔は目にあり／＼と残つて居るから、彼奴にだつて左様だらう、それが出たのサ。」

と自分は答へたが然し自分は此事を然く淡泊に考へては居なかつたので、実に言ひ難き或問題に触れた気がして、此二三日は少なからず之に悩まされて居たのである、人の心に潜む残忍、冷刻、又は他が之に触れて傷いた心、そんな事ばかりでない、尚ほ或物。

これらを相手の知人に話しても解らず、むしろ彼から聞た方が可いので、彼の男の身の上を彼是と尋ねた。

彼男は町で評判は余り可くないが、口きゝで勢力は可なり有る上に商法にかけて抜目なく、彼一代で今の一万ばかりの身代を作つたといふこと。彼は変物で、折り／＼気が変になる事があるといふ事。夫婦の間に子なく、其為め姪を貰つて育て居るが、不思議とそれを非常に可愛がるといふ事。以上よりも重大の事は、彼の今の妻は後妻で、先妻は彼が商用で旅行して居る留守に、不義をして情夫と逃亡したといふ事。けれど気の変になつたのは其為ではなく初めより彼は荒々しき気性を有し、やゝともすると妻を乱打して非常に虐待し、妻の不義をしたのも一つは其為彼を厭ふたからだといふこと。そして彼の唯一の嗜好は釣魚であるといふ事などを聞き得た。

其後、夏の初めである。自分は郊外に出て河岸をたどり散歩して居ると彼の釣を垂れて居るのを見た自分は思ふところがあるので、傍に倚り

「釣れますか」と軽く言葉をかけた、彼はふりかへつて自分を見たが、直ぐ又た水面を熟視して居る。

「釣れますか」と自分は今一度言つて、更に傍に近づいた。するとふり向いて例の凄顔で自分を見て、傍に在りし魚籠を取つて、自分からは見えぬ側に置き、そして何の返事もせず直ぐと眼を水面に転じた。

結局、自分までがやられて了まつた。自分は物思に沈みながら暫らく散歩して居たが名残りなく晴れた美しい蒼空も、声清く啼く雲雀も面白くなくなつて、間もなく帰路に就いた。

(本文は原則として、学習研究社版『国木田独歩全集 第三巻』に基づく。)

〈注〉 さなきだに「ただでさえ

問一 傍線部㉑㉒の漢字の読みをひらがなで書け。

問二 傍線部①にあるような風景描写は、この後、「自分」の心理状態とどのように関係づけられて書かれているか、説明せよ。

問三 傍線部②における男の描かれ方は、それまでとどのように違うか、具体的に説明せよ。

国語問題訂正

訂正

国語

問題冊子5ページ

〔2〕 問題文の3行目

(誤) 其泥だらけの手に帽子を

(正) 其泥だらけの手にて帽子を

問題冊子6ページ

〔2〕 問題文の13行目

(誤) 実際妙な事も

(正) 実に妙な事も

問題冊子7ページ

〔2〕 問題文の2行目

(誤) 変物かわりもので

(正) 変物かはりもので

問題訂正
国語

香川大学

問題冊子 2ページ 2行目

(誤) 固体

(正) 個体
